

高鷲の大神楽について(2)

高鷲の神楽がいつ頃からはじまり、何処から伝わってきたか、はっきり知る手がかりはない。農耕を生業とする高鷲の住民にとって、生業と自然(神)と調和した生活を忘れては、集団の秩序も自分の幸せも保たられないことを知った人々の知恵として、年中行事の中で最優先されてきたのが祭礼であった。神々の力によって五穀が豊かに実り、平和な暮らしが出来るようにと、神の助けを求めた。だから高鷲の住民は氏神や秋葉火の神や山の神など、生業に関わりある神を社に集まって、春には豊作を祈り、秋には五穀豊穰の喜びを称えて祭を奉納した。「東西、東西 天下泰平、国家安全、豊年満作、皆令満足、氏子繁昌の為大神楽舞い始め候よう。」と大神楽のはじめに東西呼ばりが述べることからそこに一端が伺える。

祭の日はどうして選んだのか。それは、神は春山を下って田の神となり、秋は山に帰り神々となる農耕神の去来思想に基づくもので、高鷲の各神社では春秋の二回の祭礼を行っている。

西洞白山神社の大神楽

長禄元年11月12日、当村の朝日助左衛門が鮎走白山神社より分霊を遷し創建、伊弉冉尊を主神として伊弉諾尊、菊理姫尊を奉納し公衆礼拝の施設を備え、神社神道に従って祭礼を行い祭神の神徳を広めるために、白山神社の拝殿前にてその年の豊作並びに社会安泰を願って大神楽を奉納した(高鷲村史)。しかしいつ頃からはじまったかは分からない。

道行曲は「岡崎」、「こすずめ」、「入拍子」で、獅子舞曲は「御幣」を持った獅子(紋付きに袴・白足袋に下駄)が上敷きの上にしゃがみ静かに舞う。その後おかめと露払いの4人がそれぞれの持ち物(平太鼓状のものや太い竹筒状のもので装飾が施し、音が出るようになっている)を持って獅子の真似をする。「悪魔払い」は獅子が刀を持って舞い、この時も5人が真似をして道化する。後の3曲は獅子舞曲の名称としては不明であるが、獅子所作によって「飛び獅子」「しらみとり」「へびとり」と静かな二つの舞がすむと獅子は日の丸の扇を左手に鈴を右手に持って舞う。太鼓が打たれると舞の途中から胴に巻いてあった蚊屋をはずし、中に2人ほど入って蚊屋を張り、獅子がシラミを捕るしぐさの舞を行う。シラミ取りが終わると、50cmほどの赤い布の中に綿を詰めて作った蛇が置かれ、獅子が蛇とじゃれながら舞、最後に蛇を飲み込んで終わる。この時も5人が戯けたっかこうをして獅子の回りを舞う。最後の獅子舞は「岡崎」で、笛吹き・太鼓打ちが全員出て、おかめが獅子頭に寄り添うように舞う。



西洞白山神社の大神楽

ひるがの白山神社の大神楽



ひるがの白山神社大神楽「喧嘩獅子」

昭和 33 年蛭ヶ野が開拓地であったため、尾神のダム水没地域から祠（神社）を移転して白山神社とした。その時、太鼓や神楽道具一式も貰う。最初は地芝居等の祭礼は行っていたが、神楽舞を習う経済的・時間的余裕がなかったため昭和 45～46 年にかけてひるがの 2 世でつくる「やろう会」が中心となって、神楽の復活が計画された。水没地区の人達は各地に四散しているので探し求め、ひるがのへ来てもらったり、岐阜・名古屋・関・白鳥に移り住んでいた尾神郷の氏子に越中の神楽の系統を習い、昭和 48 年から始める。なお役者は 3 回

目までは全て大人が復活しました。これが郡上の地で飛騨系の神楽が移入された理由です。大神楽の練りは、午前中は部落の氏子総代の家を回って舞い、その練りの順は出花(1)一田楽(1)一幟(2)一笛吹き(5)一太鼓打ち(2)一はなとり(2)一獅子(4)一黒鬼面(1)となっている。午後、神事の後に神楽が始まる。最初には「宮参り」が行われ、次いで「吉崎獅子」「京振り」「京かぶり」「跳び獅子」「越後獅子（へび取り）」「喧嘩獅子」が舞われる。舞が終わると「宮下がり」で全てが終了する。「宮参り」は、4 人の若者が獅子蚊屋に入り、本殿に向き、その前に 2 名のはなとりが采を持って並ぶ。笛と太鼓の合わせて前進し、拝殿前で一礼をする。「吉崎獅子」は、境内後方から前進しつつ舞う。始めにはなとりが采を持つが途中から刀を持って舞い、獅子をやっつける所作で終わる。「京振り」「京かぶり」：はなとりが刀を持って舞う。「跳び獅子」：獅子だけが舞う。「越後獅子（へび取り）」：獅子がへびを取って食う所作をする舞い。「喧嘩獅子」：子役と獅子が掛け合いをして、最後に子役が勝という内容の舞い。

お知らせ

令和 6 年 10 月 12 日 14:00～

たかす町民センター

講師：若宮 多聞 先生

演題：「中世武士と白山信仰について」(仮題)

鎌倉時代から室町時代の武士がどのように白山信仰を見ていたか、また長滝神社の役割について詳しくお話をしていただきます。